

# アーウィーまじえて……『大平語録』

「武骨で無趣味」と自らを評する寡黙の人・大平新総裁の人生観、政治姿勢、公約を、これまでの朝日新聞の記事から昭和五三年十一月三日にまとめて紹介したもの。

## 人生観

「一瞬が意味のある時もあるが、十年が何の意味も持たない時もある。歴史とはまことに奇妙なものだ」(53年11月27日、自民党総裁選予備選挙で勝利が決まって)

「人間は強くないし、愚かでもある。そういう諦観(ていかん)がありますな、私には。しかし、そこにとどまっていかなわけで、いずれ枯れる朝顔でも毎日水をやるでしょ。そういう気持ちを大事にしたい」(53年11月10日付「朝日新聞」夕刊)

「自分は弱虫であるが、一生懸命、自らにムチ打ってやってまいりたい」(53年11月4日、総裁選立候補者の共同記者会見)

「人間の世界はしつと海じゃないですか。おなごばかりでなく、男の世界はもつと厳しい……。人間はそんなに立派じゃないよ」(「自分の顔について」) どういう感想も持ちませんね。責任をもてる顔でありたい、と思っただけで……。もともと、目鼻立ちの造作はよくないが、といって、つけかえるわけにもいかんし、まあ、あきらめていますかね」(53年10月27日号「週刊朝日」)

「聖書というのは、やはり私に影響を与えた最高の本でしょうね。あの本は宗教的な意味というよりは、イエス・キリストという人をめぐる人間絵巻です。だから師弟の関係、主従の関係、権力と非権力の関係それから目に見えるものと目に見えないものをどう考えとかが、そういう一つの壮大なストーリー

「です」(53年9月、対談集『複合力の時代』)

「財産は背中にはって歩くものではない。隠しこ  
とがため、というのでは人生、生きる値打ちがない」  
(50年1月23日、参院決算委員会で、「田中金脈」問題  
に関連して資産公開を求められ)

「着たきりすずめになってしまった。先ほど妻  
と電話で、これからは人さまのために働こうと話し  
合った。洋服箱にたくさん衣服をつるしていても仕  
方ない。しっかりしておれば立派な生活はできるも  
のだ」(49年1月12日、自宅焼失の知らせを聞いて)

「あんまり上向いて歩いたって、つまづく恐れが  
ある。といって、あんまり卑屈になることもない」

「仕事をする上で、ある地位を持った方がベター  
だといえるが、地位はあくまで二義的なこと」(46年  
4月23日付「朝日新聞」朝刊。同月、前尾繁三郎氏  
から宏池会「故池田勇人氏がつくった派閥」会長を  
引き継いで)

「凡夫である私は生きる希望と情熱を失いかけた。  
彼はなにものにも代えられない、いわば私にとって  
は全部に近い存在であった。重い鉛のような悲愁が、  
鋭利な刃物のような力で今なお私の胸を刺し続けて

いる」(41年8月、「長男正樹との永別」。正樹氏はペ  
ーチエット病で39年8月、26歳で死去)

### 政治姿勢

「信頼と合意の政治」(53年12月1日、朝日新聞社  
のインタビュー。政治姿勢のキヤッチフレーズを聞  
かれて)

「今後、田中派諸君は名譽ある勢力として自重  
された行動をとられるに違いないと考えるし、また  
そう期待し、確信している」「私と田中(角栄)君と  
の個人的な友情は変わらない。けれど、公人として  
節度あるお付き合いをしなければならぬことは先  
方も承知していると思うし、私もよく心得ているつ  
もりだ」(53年12月1日、自民党総裁として初の記者  
会見)

「あまり硬直した対決、対立は賢明でないし、必  
ずしも強くない。達人の剣は『生卵を握るがごとく』  
という。そうでなければ、変に応じられない。柔軟  
であるが、強じんな手法でゆきたい」(53年10月28日  
付「朝日新聞」朝刊)

「人間は派閥的動物であり、三人寄れば二つの派

関をつくるものだ。仏さま、神さまの宗門も派閥はひどい。派閥はいかんとはいえないし、政党の派閥なんか、かわいいものだ」(53年1月26日、総裁選がらみの派閥活動が公然化していく中で)

「もし(連合が)考えられるとすれば、ある政策や領域、たとえば外交とか経済政策、福祉政策などの面で政策協定しましょう、ということだと思おう。今のまま融通無碍(むげ)に対応して、政治のコマ回しをすればいいんだから」(53年1月1日付「朝日新聞」朝刊。飛鳥田社会党委員長との対談)

「ロッキード事件を徹底的に究明することは、政府・自民党の不動の方針だ。しかも、このことは国民的なコンセンサスになり、いかなる政党が政権をあずかるうとも、いかなる人が政権の座につこうとも、このコンセンサスはゆるがせられない状況になっている」(51年8月29日、「三木退陣」を求める動きが「ロッキード隠し」と受けとられていることに反論して)

「政界に身を置くもの一人として、また友人の一人として国民に対して申し訳ないと思っている」(51年7月27日、ロッキード事件での田中前首相の遠

捕について)

「こんどの中国との話し合いは、そういう(尖閣列島領有問題)区々たる問題にふれずに、あくまで日中国交正常化という荒仕事を中心だった」(47年9月30日、外相として日中国交正常化を果たし帰国後)

「私など、韓信のマトくぐり、でもエ工と思いがすが、それで日本のためになるなら」「池田にも酌はしてやりませんな。あの人? えー、一合か二合ではサえますがね。それ以上のむと、他愛もない自慢話ですよ。聞いてもタメになりませんな」「誠心誠意しか芸がないですよ。操縦とかPRとかできませんわ。チエがないんですから」(36年1月9日付「朝日新聞」夕刊)

### 公約

「一般消費税の導入問題は、来年度予算編成に取り組む過程で、歳出、現行税制を洗い、ギリギリの手順を踏んでからでない、導入の方向で検討に入るわけにはいかない」(53年12月1日、朝日新聞社のインタビュー)

「総裁選挙を機に自民党のワク組みを変えろべきだ。いわゆる拳党協体制をなくすべきだ。保守本流とか傍流といった意識を捨てて、自民党が一体とならねばならない」(52年11月22日、大平派参院議員の総会で)

「開かれた国民政党のあり方として、この(総裁選)制度は前進だと思う。その結果を吟味して、是正すべきものがあれば、是正は当然だが、総裁選挙の仕組みを後退させることがあってはならない」(53年11月15日、総裁選遊説先の名古屋市で)

「身障者に対して雇用を義務づけているのと同じ手法を高齢者に対しても、とってゆかなければならぬ」。「円高問題は日本の輸入を増やすため、市場を開放する方向にもっていくのが本筋だ。並行して円建て債の消化を国内市場で引き受けてゆく」、「最善を尽くしているのだから、(七%成長に)こだわる必要はない。諸外国が日本に期待しているのは、經常収支の黒字減らしてであり、国内では経済を正常な状態にもってゆくことだ」(53年11月6日、総裁選遊説先の福岡市で)

「今、解散をもって世に民論を問うべき問題はな

い。解散する時期ではない」、「一つの戦略と二つの計画目標を考えている。戦略とは総合的な安全保障の確立と強化。計画目標はまず田園都市の建設。住みやすく、住民に帰属意識があり、みずみずしい人間関係が脈打つような田園都市が必要だ。もう一つは家庭基盤の充実。年金、相続、税制をどうすべきか考えなければならぬ」(53年11月4日、総裁選立候補者の共同記者会見)

「われわれは、権力志向に根ざす行政府の硬直した姿勢を戒めねばならない。政治はつねに謙虚であると同時に自己改革を怠らず、時代の要請に有効にこたえ得る構えが必要である」(53年11月4日付「自由新報」。総裁選に向けての政見)

「安全保障は、軍事力だけでなく政治、経済、外交、文化、科学もろもろの複合的な力によって形成されているのだから、軍事力だけを偏重する考えはとらない。自衛隊法と関連法に不備があるなら、改正にやぶさかでないが、私は現行法で有事に対応できると思う」、「改憲論議は結党以来の問題だからあってもよいが、いま国民的コンセンサスが熟しているとは思わない」(53年10月28日付「朝日新聞」)

## 大平正芳の政策要綱資料

大平側近は、昭和五三年秋の総裁公選で、予備選後の国会議員による本選挙にそなえて、大平の基本的な時代認識を踏まえた政治観、経済観、人生観をパンフレットにまとめ、その刊行を準備していた。鮮やかな予備選の結果によって福田氏が本選挙を辞退したため、このパンフレットは配布されるにいたらなかったが、その内容は、その後の大平政治の骨格を示すものとなった。

### 本稿の表記について

『』は、自由新報に掲載された所見（政治に複合力を）からの引用、「」は、新聞等に報道紹介された「大平発言」からの引用である。

「政治家は約束したことはどんなにつらくても果たさねばならない」（10・31・日経など）

「有言実行であるべきだ」（10・26・各紙など）

「いったことを実行する。建前と本音を一致させる。……いちはやすく実行は難しいことだが、真剣に努力しなければならない。」（10・28・朝日）

この「政策要綱は」、「大平政治」を真に具現するためのものである。それがまさに、いまというこの時代に人類と日本人が求めているものと合致すると思われるからである。

従って、政策の企画・運営に当たっては、「大平哲学」とでもいっべきものを、緯系（よこいと）、ヨコ軸」に、現状の認識と将来への展望 「大平識見」とでもいっべきものを経系（たていと）、「タテ軸」に、この「タテ・ヨコの軸」をしつかりと踏まえていかなければならない。

政策は、この「タテ軸」と「ヨコ軸」の上に構築されるが、その場合に、『国民の合意』となっているものや『基本政策』として訴えられた『一つの戦略、

二つの計画』を「主軸」とし、これらに準じる政策を「副軸」とし、他の政策もこれら主要軸との整合性を図っていかなければならない。個々の政策はこのような観点から十分に吟味されなければならない。また、政策は「中長期の目標」であるものと「当面の施策」とをはっきり区分しておかなければならない。

## プロローグ

『政治に複合力を  
ゆとりある家庭』  
ゆるがない日本

『黎明にむかつて』 「確かなる未来」を

『順調な戦後経営は、昭和四十年代の半ばからにわかに崩れはじめ、大地が揺れ動くような不安定な時期が続きました。しかし、戦後三十余年、私たちは幾多の試練にめげず、今日までよくやってきた……。私たちが享受している自由や平和や繁栄は、先進西欧諸国に比べても決してひけをとるものではありません。……』

時代は急速に変貌しています。そして長く苦しかった試練を経て、ようやく黎明が訪れてきました。あたりはまだ闇でも、頭をあげて前を見れば未来からの光がさしこんでいます。後を向いて立ちすくむより、進んでその光を迎え入れようではありませんか。

……選択は、慎重で聡明でなければなりません。私は、みなさんの選択が必ずや時代をひらく鍵となることを確信いたします。

私は、……ゆるがない日本を築くことに全力をあげる決意であります。……』

「民族に対し、確かな未来を託する指導者は、大平氏をおいていない。」(10・21・鈴木善幸氏の発言。10・21・読売・夕など)・

不確定といわれる時代を迎えて、国民は「確かな未来」を求めている。

『黎明にむかつて』、今こそ、「勇気をもって前進を」開始すべきときである。

日本人の秀れた資質とひたむきさこそ未来を切り拓く力であり、それを通じて人類の文化に貢献すべきときである。

この大事業が私の世代に完成することがなくとも、私は次の世代が力強く引き継いでくれることを信じている。

ためらうことなく、『後を向いて立ちすくむ』ことなく、私とともに前進を開始してもらいたい。なすべきことはあまりに多い。文化の継承、交流と創造、『科学技術の革新』、地域、海洋、地球、宇宙……、開拓すべき、挑戦すべき「新たな領域」(フロンティア)は無限に広がっている。国民の、次の世代の可能性を最大限に引き出すことが、私の責務だと信じている。

「確かな未来」を求めて、『ゆるがない日本、ゆとりあり家庭』を築いていくつではありませんか。